

## 「光源氏の老い」の描かれ方

伊佐山 潤子

### はじめに

「若菜上」巻で光源氏は四十歳を迎え、ここから漸く源氏も老いを見せることになるが、早くに池田勉氏が「老年の意識」を論じられて<sup>①</sup>以来、光源氏の老いは専ら「意識」の問題とされてきた。肉体・容貌といった外見に関しては「すこしも老年を想わせない、若わかしい容姿を保っている」と言われ、永井和子氏が、「光源氏の場合は自覚的な老齡意識はありえても、客観的な『老い』の問題の対象とはなさない。物語りの主人公に『老い』は存在しないのである。」と述べられたこと<sup>②</sup>でそれは確定されたようである。

確かに光源氏の最後の登場場面である「幻」巻でもその姿は

御かたち、むかしの御光にも又多く添ひてありがたくめでたく  
見え給(幻二〇六)

と描かれており、「彼は歳月を経て容貌には決して衰えを見せぬ、不思議な存在として描写され<sup>③</sup>」ているかに見える。だがしかし本当にそうなのであろうか。

光源氏は生まれた時からさまざまに機会にいろいろな人に見られていたのであるが、「若菜上」巻以降に誰かが光源氏を見るといふ場面

は七箇所しかない。そして、その中に、全く無関係のあかの他人に、一人で居るところを見られるということは一度もないのである。「他者の目には匂いやかに美しく、若さを保持したままに映る光源氏」、<sup>④</sup>「他者の眼には老いによる衰退が微塵も映らぬ光源氏」とも言われるが、この「他者」とは一体誰なのか。この点に留意して、以下、源氏が誰にどのような状況で見られているのかを探って行く。

1

最初は玉鬘が若菜を献じた時。

① いと若ききよらにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおほゆるさまの、なまめかしく人の親げなくおはしますを、(若菜上二三五)

次は、女三の宮を六条院に迎えて四日目、宮のもとへ文を送る源氏の姿である。

② 白き御衣どもを着給て、花をまさぐり給つ、友待つ雪のほのかに残れる上に、うち散りそふ空をながめ給へり。鶯の若やかに、近き紅梅の末にうち鳴きたるを、「袖こそ匂へ」と花をひき隠して、御簾おし上げてながめ給へるさま、夢にもか、る人の親にてをもき位と見え給はず。若うなまめかしき御さまなり。(若菜上二四五〜二四六)

②に続いて、結婚五日目のこと。

③ けふは、宮の御方に昼渡り給。心ことにうちけさうじ給へる御ありさま、今見たてまつる女房などは、まして見るかひありと思きこゆらむかし。御乳母などやうの老いしらへる人々ぞ、

いでや、この御ありさま一所こそめでたけれ、めざましきことはありなむかし、とうちまぜて思ふもありける。(若菜上二四七)

朧月夜と一夜を過ごした源氏を中納言の君が見送る。

④ 山際よりさし出づる日のはなやかなるにさしあひ、目もか、やく心ちする御さまの、こよなくねび加はり給へる御けはひなどを、めづらしくほど経ても見たてまつるは、まして世の常ならずおぼゆれば、(若菜上二五四)

冷泉帝の命により夕霧が主催した「四十の賀」の場面。

⑤ 母屋の御座に向かへて、おとゞの御座あり。いとよきにものくしくふとりて、このおとゞぞいま盛りの宿徳とは見え給へる。あるじの院は、猶いと若き源氏の君に見え給。(若菜上二六六)

蹴鞠の際に女三の宮を目撃した柏木が、その直後の宴席で源氏を見て。

⑥ ……たはぶれ給御さまの、にほひやかにきよらなるを見たまつるにも、かゝる人にならひて、いかばかりの事にか、心を移す人はものし給はん、何ごとにつけてか、あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかしきこゆべき、と思めぐらすに、いとこよなく、御あたり遙かなるべき身の程も思知らるれば、胸のみふたがりてまかで給ひぬ。(若菜上二九九)

以上すべて、「若菜上」巻で、この後、源氏はぱったりと誰からも見られることがなくなる。女三の宮と柏木の事件、薫の誕生、柏木の死、夕霧の恋を経て、紫の上の死去、そして「幻」巻の末尾に現れる源氏の最後の姿。

⑦ その日ぞ出でたまへる。御かたち、むかしの御光にもまた多く添ひてありがたくめでたく見え給を、このふりぬる齡の僧はあいなう涙もとゞめざりけり。(幻二〇五―二〇六)

これら七例のうちで源氏が「若い」と言われているのは、①②⑤で、いずれも源氏四十歳の時である。まずこれらについて考える。

## 2

① いと若くきよらにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおほゆるさまの、なまめかしく人の親げなくおはしますを、めづらしくて、年月隔てて見たてまつり給は、いとほづかしけれど、猶げざやかなる隔てもなくて、御物語り聞こえかし給。(若菜上二三三)

①は若菜を献じに来た玉鬘が源氏と対面した時のこと。しばしば引用される場面であり、「光源氏は昔と変わらず、若く美しい。賀を奉ずる養女・玉鬘の視線を通して、そのことは強調されている」と、言われているところである。がここで疑問なのは、これは玉鬘の視線なのかということである。もしもこの文全体の主体が玉鬘とすると、敬語の用いられ方に問題がある。「おほゆる」には尊敬語「給ふ」がなく、「見たてまつり」には「給ふ」があることは何を意味するか。文の前半と後半で主体が異なるからとは考えられないだろうか。それに、「人の親」は目の前にいる親に対して用いる表現ではないのである。さらに言うなら、玉鬘が源氏を「親」と言った例はない。<sup>10)</sup>

さて、この場面以前に玉鬘は源氏をどのように見ていたのだろうか。「若菜上」巻から四年前にあたる「行幸」巻にはこうあった。

西のたひの姫君も立ち出でたまへり。そこばくいとみ尽くし給へる人の御かたちありさまを見給に、みかどの、赤色の御衣たてまつりて、うるはしう動きなきかたはら目に、なずらひきこゆべき人なし。わが父おとゞを、人知れず目をつけたてまつり給へど、きら／＼う物きよげに、盛りにはものしたまへど、いと人にすぐれたるたゞ人と見えて、御輿のうちよりほかに、目うつるべくもあらず。まして、かたちありや、おかしやなど、若き御達の消えかへり心移す中少将、なにくれの殿上人やうの人は、何にもあらず消えわたれるは、さらにたぐひなうおはしますなりけり。源氏のおとゞの御顔さまは、こと物とも見え給はぬを、思ひなしのいますこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。さはかゝるたぐひはおはしがたかりけり。(行幸五九〇)

行幸を見物して冷泉帝を見た玉鬘は輿の中の帝から目を離すことができない。冷泉帝は源氏よりも「かたじけなく、めでた」く、「なずらひきこゆべき人なし」である。またこの二年後「真木柱」巻で、参内した玉鬘の局に冷泉帝が訪れた時、

月のいと明かきに、御かたちは言ふよしなくきよらにて、たゞかのおとゞの御けはひに違ふところなくおはします。かゝる人は又もおはしけり、と見たてまつり給。(真木柱一三五)

これに続いて、冷泉帝が玉鬘に言葉をかけた時には、

仰せらるゝさま、いと若くきよらにはづかしきを、違ひ給へるところやある、と思なぐさめて(真木柱一三六)

お返事をしたとある。「きよら」が繰り返されているが、ここで明らかのように、玉鬘が「いと若くきよら」と言っている人物は源氏では

なくて、冷泉帝のことであった。

「蛭」巻には、兵部卿宮を玉鬘にあまり近づけまいなどと、源氏が、活けみ殺しみいましめおはする御ありさま、尽きせず若くきよげに見え給。つやも色もこぼるばかりなる御衣に、なをしはかなく重なるあはひも、いづこに加はれるきよらにかあらむ、この世の人の染め出だしたると見え、常の色も変へぬあやめも、けふはめづらかにおかしくおほゆるかをりなども、思ふ事なくはおかしかりぬべき御ありさまかな、と姫君おほす。(蛭四三二)

とあるが、ここで、源氏が「尽きせず若くきよげに見え」と言っているのもやはり語り手であつて、玉鬘ではない。玉鬘は、言い寄られるなどということがなければ「おかしかりぬべき」ご様子と言うのみであつて、後にも先にも玉鬘が源氏の容姿について何か言っているとこころは、ここ以外にはない。この点からしても、源氏が四十になった時に玉鬘が突然「いと若くきよら」と言うことは考えにくい。やはりここは語り手の視線と解すべきところではないだろうか。

3

女三の宮に手紙を送る新婚四日目の源氏の様子が②に描かれる。

② 白き御衣どもを着給て、花をまさぐり給つゝ、友待つ雪のほかに残れる上に、うち散りそふ空をながめ給へり。鶯の若やかに、近き紅梅の末にうち鳴きたるを、「袖こそ匂へ」と花をひき隠して、御簾おし上げてながめ給へるさま、夢にもかゝる人の親にてをもき位と見え給はず。若うなまめかしき御さま

なり。(若菜上二四五～二四六)

ここは召された文使いの目に映る姿か。それともそこに侍っている女房の視点から書かれたものか。あるいは語り手の言い分か。いずれにしても、この視線の持ち主は前々から源氏のお側近くに居た者には違はなく、この人物はいわゆる「古女房」ということになるか。①と同様に「人の親」がここでも用いられているのは注目される。語り手もそこに含まれる「古女房」は、「源氏びいき」で、「依然として源氏の若々しさを礼賛し続け」ているとされる。とすればここにもか나의「ひいき目」がありはしないだろうか。

ほかにも③で、老いた乳母たちは源氏の「めでたさ」を言うが、初めて源氏を見たおそろくは年若い女房達の感想は直接述べられてはいないという具合に、源氏を見る人物の年齢が、実は問題なのである。

③ けふは、宮の御方に昼渡り給。心ことにうちけさうじ給へる御ありさま、今見たてまつる女房などは、まして見るかひありと思きこゆらむかし。御乳母などやうの老いしらへる人々ぞ、いでや、この御ありさま一所こそめでたけれ、めざましきことありなむかし、とうちまぜて思ふもありける。(若菜上二四七)

「今見たてまつる女房など」には「らむ」と推量が使つてあつて、断言が避けられているところは見逃せない。<sup>16)</sup>

老いた女房と若い女房との違いは「若菜上」巻頭近くにも描かれていた。女三の宮の婚候補としてまず現れるのは夕霧である。朱雀院の目にも、

二十にもまだわづかなる程なれど、いとよくと、のひ過ぐして、かたちも盛りのにほひて、いみじくきよらなる(若菜上二二一)

と映る夕霧を女房たちが褒めたことから、それに対比されるかたちで源氏が出てくる。

女房などは、のぞき見きこえて、「いとありがたくも見え給かたち、用意かな。あなめでた」など集まりて聞こゆるを、老いしらへるは、「いで、さりとも、かの院のかばかりにおはせし御ありさまには、えなずらひきこえ給はざめり。いと目もあやにこそきよらにもやし給ひしか」など、言ひしろふ(若菜上二二二)

ここで源氏をべた褒めしているのは、②と同様に「老いしらへる」女房である。「このくらいのお年の頃の源氏はこんなものではなかった」などと言われても、年若い女房たちにそれが通じるわけがない。二十年ばかり前の源氏の美しさがどれほどのものであったにせよ、彼女らにしてみれば今、目の前に居る夕霧こそがすばらしいのである。「おはせし」「ものし給ひしか」と、老いた女房は過去形を用いているのであつて、この時点で三九歳の源氏が一八歳の夕霧と比較してどうなのか、そのことについてはここでは何も語られてはいない。

その後源氏が見舞う場面があるが、その場は「女三の宮を頼む・引き受ける」という重要な話が進むところであつて、女房たちが源氏を覗き見するような描写は一切ない。従つて、ここで夕霧を「あなめでた」と言った若い女房たちが源氏を見てどのような感想を持つかは結局書かれず仕舞いになるのである。

このように女房達は年齢によって二つに分けられており、源氏を美しい・すばらしいと言うのは常に「老いた」女房・乳母たちである。若い女房が光源氏を見てどう形容するのか、そのような機会は避けられていと言わざるを得ない。

同様のことは結婚の一方の当事者である女三の宮についても言える。六条院に迎えて後、光源氏は彼女のことを「いとちいさく・いはけなく・ひたみちに若び」などと見ているが、女三の宮が夫となった源氏を見てどのように思ったのか、物語は全く沈黙して語らない。

さらに四年前には、右近が源氏と玉鬘を見て、

右近も打ち笑みつ、見たてまつりて、親と聞こえんには、似げなう若くおはしますめり、さしならびたまへらんはしもあはひめでたしかし、と思ひゐたり。(胡蝶四一〇)

推量の「めり」付きではあるが、源氏が玉鬘の「親」には似つかわしくない、二人は親子より夫婦の方がお似合いだと思ふところがあつた。ただし右近は源氏にも玉鬘にも非常に近い関係であつて、無関係の第三者とはこの二人に対する思い入れがまるで違う事を忘れてはならないし、これも「夕顔」巻以来源氏に仕えて来た「古女房」である。が、少なくともこの時点で右近の目には三六歳の源氏と二二歳の玉鬘はカップルしておかしくなかつたということである。ところが、「若菜上」で、源氏を女三の宮の「親」と言うのはふさわしくないと思つた人物は一人もない。朱雀院も乳母も、春宮も、関係者全員が「親さまに」であつた。源氏と女三の宮を親子のようではなく、お似合いのカップルだと言う人物がいないうことは何を表わしているのであろうか。

以上のことは、後の、運命の蹴鞠の場面ともかかわつてくると思われる。

御簾が猫に引きあげられたのにも全く気付かず女たちが見物に熱中していたのは

鞠に身を投ぐる若公達の、花の散るをおしみもあえぬけしきど

もを見ると(若菜上二九七)

であつた。女三の宮の周囲は、女房などもおとなくしきは少なく、若やかなるかたち人の、ひたふるにうちはなやぎ、さればめるはいと多く、数知らぬまでつどひさぶらひつゝ、もの思ひなげなる御あたりとは言いながら(若菜上二九一)

という状態である。ここに居るのは何も物思いの種はなさそうな若い女房たちではあるが、彼女等がただ一つ物足りなく思うものがあつたとしたらそれは「若さ」ではなかつたらうか。若い女房たちの蹴鞠見物の熱中ぶりから、何不自由ない生活の中でただひとつ、若さに関しては飢えていたと言えないか。なぜここまで熱中するのか、しないではいられないのか。「若さが、御簾の内側と外側という境界を越えて、同世代として響き合つていたから」<sup>17)</sup>である。この場面の源氏(四一歳)は螢兵部卿宮とともに高欄から眺めているだけだ。

4

「若い」ということばが用いられるもうひとつの例。

⑤ 母屋の御座に向かへて、おとゞの御座あり。いとよらにものくしくふとりて、このおとゞぞいま盛りの宿徳とは見え給へる。あるじの院は、猶いと若き源氏の君に見え給。 (若菜上二六六)

「他者の眼にはやはりどこまでも若い源氏の君と映る」と言われているところである。ここで源氏を見ているのもまたしても語り手か。がしかし、ここでは太政大臣の存在が問題である。「いときよらにも

くしくふと」った太政大臣と比べるからこそ源氏の様子がより若く見えるのである。この太政大臣は、葵の上の兄か弟か<sup>19</sup>で年齢は上下するが、兄だとすると少なくとも源氏より五歳は年長のはずだし、弟だとしてもまず同年代ではあるわけだから、一方が太つており一方がそうでなければ二人の実年齢差以上に見えても不思議ではない。そして、もしここに太政大臣の存在がなかったとしたらどうであろうか。

「行幸」巻には、当時内大臣だった時の姿が

丈だちそゝろかにもものしたまふに、太さもあひて、いと宿徳に、おもゝち、あゆまひ、大臣と言はむに足らひたまへり。(行幸

七〇)

とあった。それから四年後、当時丈と太さが合っていた太政大臣がさらに太つて貫禄を増していること、それに比べて源氏の体形にはあまり変化のないことがうかがえるものの、この祝いの席に居る太政大臣以外の人物、たとえば夕霧と比較した場合に源氏がどう見えるのか、物語りはそれについてはやはり黙している。

以上「若い」という言葉の出ている場面①②⑤と合わせて③について述べた。すべて語り手ないし古女房の言い分であった。次に、残りの二箇所を見てみよう。

④は十五年ぶりに再会を果たした朧月夜のところから朝出て行く源氏を「中納言の君見たてまつりをくるとて」、

④ 山際よりさし出づる日はなやかなるにさしあひ、目もか、やく心ちする御さまの、こよなくねび加はり給へる御けはひなどを、めづらしくほど経ても見たてまつるは、まして世の常ならずおぼゆれば、(若菜上二五四)

朱雀院が出家して朧月夜は二条宮に退出、後を追って尼になろうと

したのを止められて少しずつ出家の準備をしているところであった。中納言の君も「賢木」巻の時から源氏を知っている女房で、往時の思い出と共に源氏を見ている。この「古女房」に源氏が客観的に見られるだろうか。

もう一箇所。

⑥ ……たはぶれ給御さまの、にほひやかにきよなるを見たてまつるにも、かゝる人にならひて、いかばかりの事にか、心を移す人はものし給はん、何ごとにつけてか、あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかしきこゆべき、と思めぐらすに、いとこよなく、御あたり遥かなるべき身の程も思知らるれば、胸のみふたがりてまかで給ひぬ。(若菜上二九九)

ここでは柏木が源氏を見ている。女三の宮を目撃したばかりの柏木は「我むかしよりの心ざしのしるし」と喜ぶが、一方源氏の様子を見ると、自分には望みがなさそうにも思える。心に秘密を抱える柏木もまた、客観的な第三者たり得ないことは言うまでもない。

以上「若菜上」巻で四十歳の年には源氏は確かに「いと若くきよら」「若うなまめかしき」「いと若き」と言われていた。しかしそれを言ったのは「語り手」を含む「古女房」であり、わずか三回のことではなかった。そのうち一回は傍らにもっと年上に見える人物が居る場面であった。それ以外に源氏を見て「きよら」と言ったのは女三の宮に對する思いを胸に秘めた柏木だけだ。もう一人、過ぎ去った時間を感じ深く思い出しながら源氏を見ている中納言の君は「こよなくねび加はり給へる御けはひなど」と言うのみである。この二人はどちらも源氏を客観的には見ることでできない人物である。一方で、源氏を今初めて見るような人物は全く現れない。源氏に対して「厳しくも強いま

なごし<sup>20</sup>」を投げかける者は誰一人いないのである。

## 5

こののち源氏は誰からも見られることがなくなり、鏡ものぞかない。

「若菜下」巻で柏木に「さかさまに行かぬ年月よ。老いはえのがれぬわざ也」と言った源氏は四七歳。源氏はこの時も「若く美しい」のであるうか。これは「自分はまだまだ美しい。柏木風情に負けてたまるものか、という自負心の裏返し<sup>21</sup>の言葉」だとも言われているが、容姿・容貌が本当に柏木に負けずに美しいのであるのならば、血筋・生まれ・身分・地位何一つ源氏が柏木に負けるものはないのではないか。単に年の数が多いだけというに過ぎないことになる。すべてにおいて柏木に劣るようなものがないにもかかわらず、ただひとつ「若さ」だけが既に自分にはない、「意識」のみならず「姿」においても「老い」を自覚しておればこそその言葉ではないのだろうか。

そして「柏木」巻以降源氏はほとんど登場しなくなる。そのかわりに夕霧が「いと若うきよら・いとめでたくきよら・限りもなうきよげ<sup>22</sup>」などと言われて、少々風変わりな恋愛の主人公を演じるようになる。さらに紫の上を亡くした後、源氏は「人にほけほけしきさまに見えじ(御法一七七)」と、人前に出ることすら避けるようになって、その源氏が最後に姿を表わすのが、これもたびたび引用されるところの、もう今年で最後かと思われる仏名会の場面。源氏はここで五二歳になっている。

⑦ 年ごろ久しくまいり、おほやけにも仕うまつりて、御覽じなれたる御導師の、頭はやうく色変わはりてさぶらふも、あ

はれにおほさる。……その日ぞ出でたまへる。御かたち、むかしの御光にもまた多く添ひてありがたくめでたく見え給を、このふりぬる齡の僧はあいなう涙もとゞめざりけり。(幻二〇五  
〜二〇六)

小嶋菜温子氏は「光源氏は〈老い〉の時を通過していく。しかし、それはあくまで観念的なものであり、「その肉体は見えない。」導師の「〈老い〉との対比によって、語られない源氏の身体がより際だつ、「〈老い〉を欠如した源氏」と述べられた<sup>23</sup>。しかし、「例の宮たち上達部などあまたまいり給へり」とあるにもかかわらず、ここで源氏を見るのが「ふりぬる齡の僧」のみであるところに特に留意したい<sup>24</sup>。ここに描かれたのは導師の老いた姿と老いない源氏の対比なのであるうか。紫の上の一周忌も終え、惑いながらも手紙の処分などをし、その年末に、自身の命ももうそう長くはないことを思いながら、避け続けていた人前に出た源氏。その姿に、ほかの誰でもない老いた僧のみが見出し得る「ありがたさ・めでたさ」が、相変わらずの「若く美しい」ことなのだろうか。

ここには紫の上との死別の悲しみも、そう遠くない自身の死をも受け入れる用意をしつつある静かな老年者の姿がありはしないか。死を目前にして、ついにいろいろな執着から解き放たれようとしている、残されたごく短い時間だけに放たれる老いた人間の輝きは、老僧にしか見えぬものではなかったろうか。他の列席者には見えない、五二歳の老いた源氏の、老いたからこそその美しさを、導師はそこに見たのではなかったかと思われているのである。光源氏の出家が曖昧にされているという問題もあげられているが、ここまでくれば出家の場面が描かれる必要はなかったであろう。

## おわりに

「若菜」巻以降を通して、まず気付くのは源氏の外見についての言及が非常に少ないということである。物語の進行と同時に源氏の年齢は確実に進んで来ているのに、その外見・容貌がどう変化したのかしないのか、語られるところはあまりにも少ない。唯一の例外として、声の変化が述べられるに過ぎない<sup>(26)</sup>。そのため、読者には若い頃の光り輝くような源氏のイメージが壊れることなく保たれ続けることになる。

源氏が実際の年齢にはとても見えない、若く見えるというのは否定できないにしても、「若い」という語を用いることによって、しかし実態はほかされてしまう。「若い」というのは相対的なことばであり、実年齢よりいくつ下に見えるのかを明確にするものではない。また、話者の年齢より下でありさえすればどんな年齢の者であっても「若い」ことになってしまふ。さらに、「昔と変わらず、若く美しい」も非常に曖昧な表現である。三年前も二十年前もひとくくりに「昔」と言われてしまうからだ<sup>(27)</sup>。

物語が源氏の老いを描かないのは、源氏に老いがいからなのだろうか。語り手の完全なる沈黙。中年期・老年期の源氏を初めて見た者の感想などは全く出て来ず、とりわけ特に若い人物が源氏を見ること<sup>(28)</sup>が完璧に避けられていること。古女房たちですら源氏の容姿に全く触れることがない事実。これは源氏がずっと「幻」巻の最後まで「若く美しい」ことを意味するのであろうか。そもそも「老いの意識」は身体の変化・衰えを自覚する時から芽生え始めるものではないか。誰しも老いて行くのはあたりまえのこと、わざわざ肉体の衰えの様

子など細かく描写する必要はない。ことさらに描かないという描き方もあるはずである。「もっと老いさせてやればいいのに」「最後まで老いることを許されない」「最後まで輝く源氏であり続けなければならぬ<sup>(28)</sup>」「いつまでもどこまでも『若く美しい光源氏』という神話<sup>(29)</sup>」に絡め取られているのは一体誰なのであろう。

## 注

- (1) 池田勉「光源氏における老年の意識について」成城国文学論集一〇(一九七八・二)
- (2) 注1池田
- (3) 永井和子「老いということば―光源氏の場合」『源氏物語と老い』(笠間書院 一九九五・五、初出一九九一・三)
- (4) 以下本文は『新日本古典文学大系』による。巻名・頁数を「幻二〇六」と記す。
- (5) 堀淳一「老いへのうつろい―玉鬘が別出する光源氏の類齢―」日本文芸論稿一八・一九(一九九一・一一)
- (6) 注5堀
- (7) 小嶋菜温子「老いの身体と罪・エロス―藤壺・光源氏」『源氏物語批評』(有精堂出版 一九九五・七、初出一九九四・一一)
- (8) 『人物で読む「源氏物語」第一三巻 玉鬘』(勉誠出版 二〇〇六・五) 玉鬘物語 〇九七ページ脚注など。ほかに、たとえば瀬戸内寂聴『源氏物語第六巻』(講談社 一九九七・九)では、この文はふたつに切つて、段落も別にして訳してある。「源氏の院はたいそうお若く美しく、こうした四十の御賀などということばは、お年を数えちがっているのではないかと思われほど花やかで魅力があり、とても人の親などにはお見えにならないのでした。／玉鬘の君は、こうして久方ぶりに歳月をへだてて源氏の院にお目にかかりますのは、ほんとうに気恥ずかしいのですけれど、さすがに昔のままに、目に立つような他人行儀さではなく、親しく色々とお話あひになります。」
- (9) ここ以外に「人の親」は七例。
- (10) 「親と思ひきこゆる人(藤袴九〇)」と源氏を言ったところが一箇所だけあ



- るが、玉鬘が「親」と言えばそれは実父・内大臣のことである。
- (11) この場面の冷泉帝については、立石和弘「冷泉帝の顔―供儀と玉鬘の視線から―」中古文学五七（一九九六・五）
- (12) 冷泉帝が源氏そっくりなのは「かたち」ではなく「けはひ」であるところに注目しておきたい。
- (13) 動詞「いましむ」はここ以外に一二例見られるが、相手が自分を戒めている時に戒められている当人が用いた例はない。また、螢兵部卿の宮に対して玉鬘が「活けみ殺しみ」などと言うのもふさわしくなからう。
- (14) 諸岡重明「光源氏の〈老い〉のエロスと〈死〉」『人物で読む「源氏物語」第三巻 光源氏Ⅱ』（勉誠出版 二〇〇五・一一）
- (15) 伊藤博『源氏物語の基底と想像』武蔵野書院（一九九四・一〇、初出一九七二・一二）。他に同様の指摘は森一郎「源氏物語の表現方法―視点・文体・人物称呼・敬語法―」『源氏物語の主題と表現世界』（勉誠社 一九九四・七、初出一九九二・二）などいくつもある。
- (16) たとえば、源氏のナルシストぶりを表わすとしてしばしば引用される「野分」巻の「御鏡など見たまひて、……わが顔は古りがたくよし（野分四五）」も、「古りがたくよしと見給べかめり」であって、これは明らかに語り手の推量で、源氏が自らをそう見ているのとは違っていることなど留意すべき点ではないか。
- (17) 三田村雅子『源氏物語―物語空間を読む』（ちくま新書一九九七・一）
- (18) 注14諸岡
- (19) 「兄」としているものが多いが、不明。『新日本古典文学大系』「帚木」三三脚注一八「葵上の兄または弟。」
- (20) 三田村雅子「源氏物語の見る／見られる」『源氏物語感覚の論理』（有精堂 一九九六・三）
- (21) 遠山紗江子「晩年の光源氏」清泉女子大学紀要三三三（一九八五・一一）
- (22) 「柏木三六」、「夕霧一四三・一五〇」
- (23) 小嶋菜温子「光源氏の身体と性―誕生から〈老い〉まで」『源氏物語の性と生誕』（立教大学出版会 二〇〇四・三）
- (24) この点に限っては柳井滋「御法・幻巻の主題」『源氏物語研究集成 第二巻』（風間書房 一九九九・九）に指摘がある。
- (25) 三橋正「男の出家」『人物で読む「源氏物語」第一巻 朱雀院・弘徽殿大后・右大臣』（勉誠出版 二〇〇六・五）
- (26) 「拍子とりて唱歌し給。院も時／＼扇打ち鳴らして、加へ給御声、むかしよりもいみじくおもしろく、すこしふつ／＼かに物／＼しきけ添ひて聞こゆ。（若菜下三三八）」
- (27) たとえば玉鬘が源氏と再会した時なら「三年前」を、源氏と朧月夜の再会の場面なら「一五年前」を、年老いた女房が青海波を舞った源氏を思い出すなら「二年前」を、それぞれ「昔」ということばで表わすことになる。
- (28) 『源氏物語りいま語り』（翰林書房 二〇〇一・五、初出一九九七・四）一四六ページ松井健児
- (29) 注17三田村
- 「謝辞」鹿兒島市城西公民館「源氏を読む会」の皆様、いつもありがとうございます。どうもご愛用します。
- （二〇〇六年十二月五日 受理）